

「琵琶湖周航の歌の作曲家」を尋ねて（9・3・15）

森 田 穰 二（昭23・文乙）

我々の寮歌「琵琶湖周航の歌」の元になった曲、「ひつじぐさ（睡蓮のやまとことば）」の作者・吉田千秋の身元が、平成五年六月滋賀県今津町が催した「琵琶湖周航の歌 開示七五周年記念事業『われは湖の子』」に当たり、千秋の東京市からの引越し先、新潟県の新聞「新潟日報」を通して今津町が行った千秋の身元探しに於いて明らかになり、千秋が旧制東京府立第四中学校の明治四五年の卒業であることも明らかになってから、早くも四年の月日が流れようとしております。私は東京府立第四中学校のあとを継ぐ、現東京都立戸山高等学校に二三年間勤めた者で、これも何かの深い因縁と思ひ、それ以来千秋の遺稿集めなどに深い愛情を傾けて参りました。その集まった遺稿の全部を今度、今日のお話しの題と同じ『吉田千秋「琵琶湖周航の歌」の作曲家を尋ねて』という本に纏め、そのため今日お集まりの皆さんに少しばかりお話しをすることになったのであります。

始めに琵琶湖周航の歴史について少しばかりお話しをしておきます。琵琶湖周航は明治二六年四月一日、二一名の三高水上部員が膽吹、比叡、比良の三隻の、新しく造ったボートを連ねて大津市三保が崎の艇庫から四泊五日の周航に出発したときに始まります。明治三九年京都大学に端艇部が出来るまでは、三高水上部が文字どおり湖の王者として琵琶湖に君臨していたのであります。その後、周航は水上部員のみならず、一般生徒にも開放されて、同級生、同じ運動部員、また出身中学を同じくする者のグループなどが周航を楽しみました。現在三保が崎に建つ「われは湖の子」の記念碑は、この明治二六年に始められた琵琶湖周航の八〇周年を記念して、三高水上部OBの会、衝涛会が先に立って同窓会から費用を募り、昭和四八年春、三保が崎の元の艇庫の上に造ったもので、「われは湖の子」の文句から想像されるような、「周航歌」とじかに関わりのあるものではありません。

大正六年六月二八日、当時の二部、すなわち大学の理、工、農、薬学方面への進学コースのクルーが、琵琶湖周航の第二夜、今津の宿で泊まりました。前日は雄松の宿で泊まっております。その夜、食後のくつろいだおり、クルーの一人、二部甲類（工学部進学コース）の中安治郎氏が「小口がボートの中でこんな歌を作った（小口太郎は二部乙類——理学部進学コース——）」と言って歌詞を発表しました。しかしこれは初稿というべきもので、果たして何番まであったのか、今日では知る由もありません。作詞には中安氏ほか數氏も協力していました。曲は全く手が着け

られていませんでしたが、谷口謙亮氏（二部甲類）が試みに当時三高の中で流行っていた「ひつじぐさ」のメロディーに合わせて歌ってみると、思い掛けずよく合うので皆喜んで合唱しました。これが「周航歌」が生まれたそもその始まりであります。

この「ひつじぐさ」の曲を三高に流行らせたのは当時盛んに活動していた「桜楽会」という三高の音楽グループで、水上部やラグビー部の中にもメンバーがいました。

「周航歌」の起りについては、後で述べる「周航歌」研究家・故堀準一氏（昭和七年理科甲類卒）も「とにかく（一高戦のような）対外試合が盛んになって三高一体感が出来てからと（三部対抗レースが一番大きな試合であったような）当時とは若干事情が違うのではなからうか。（中略）その間にできた『周航歌』を水上部の歌のごとく言うのは適當でなく、これは二部の歌として生まれ、そして寮歌として広く一般生徒によって歌い継がれて来たことは現在の『三高歌集』分類のとおりである」と言われるように、中安治郎、小口太郎の両氏が「我々も我々の歌を持つてではないか」と話し合っていたと伝えられる春先の始めから、この歌は水上部の部歌としてではなく、二部クルーの歌として生まれる運命を持っていたと申せましょう。

新しい学年を迎えた九月、新入生を歓迎する寮の大コンパの席上、前に述べた谷口謙亮氏（当時二年生で、寮の、二部を代表する総代になるかならないかのころだったと思われます）がこの歌を披露しましたが、途中で前に述べた中安治郎氏から止められ、二番で中断しました。歌詞が

全部出来上がっていないし、曲もまだ本格的に検討されていないという事情からだったと思われます。谷口氏は声も美しく、歌も上手であったので、この時ウル「周航歌」に聞き惚れて水上部に入った田島良行氏（一部）のような人もいます。

その後も小口氏は熱心に推敲を重ね、何度か推敲の相談会も持ちましたが、翌七年夏の周航のあと、夏休み中に歌詞は出来上がり、九月には公表されました。推敲の相談会については、六年一月に中寮七番室において渋谷政俊氏（一部）が「はかない恋に泣くとかや」は「はかない恋に泣きしとか」と過去形にしてはどうかと提案したこと、「西国一〇番長命寺」は、本当は三一番であるのに誤りを承知のうえで、「語呂が悪い、歌にならんから」と言って小口氏はそのままにして変えていないこと、とが伝わっています。七年周航前における橋本三弥、石川鉄弥氏ら同級（二部乙類）の親しい友人たちによる相談会では、「赤い椿」はいかにも平凡だから「白い椿」にしてはどうかという意見が出たりして、これは現在の歌集（平成五年、創立一二五年記念版）の「暗い椿の森陰」が元の形とする考えに対して、「赤い椿」を元の形とする有力な根拠となっています。

メロディーについては、小口氏は別に小学唱歌「な響樂の都」を手本とした新しい曲を考えたときがあったという同級の親友・小玉博司氏の証言もあります。九月には三年生となって勉強に忙しくなったためか、そのまま捨て置かれ、「周航歌」は「ひつじぐさ」の譜を借りたまま、三

高の中から京都市内や滋賀県内の中学校、女学校などのルート、あるいは兄弟姉妹、親類の縁故などを通して、驚くほど短い間に全国の学生の間に流行を見るようになりました。

小口氏が既にあったメロディーに合わせて歌詞を作った訳ではないし、歌詞に合わせて曲が作られた訳でもありません。特にアメリカ人ガードンの曲に基づく「真白き富士の嶺」を元の曲とする説は、初めの三つの音が似ているだけで、全く誤りです。

三高のなかではこのメロディーは「周航歌」となって、元の「ひつじぐさ」は忘れ去られ、三高の外では「ひつじぐさ」は注目されることにならなかったのか、いつのまにか消え去り、時が経った後、両者が同じ曲であると指摘した人は長い間どこからも出ませんでした。

次に「琵琶湖周航の歌」の起こりを調べる歴史について、その立役者であった故堀準一氏のご努力を中心に少し述べさせて頂きます。「周航歌」の起こりを調べる歴史は、昭和四七年「三高同窓会会報」四一号に堀氏が『琵琶湖周航の歌とその作者』という一文をお載せになったときに始まります。それまでは『三高歌集』にも大正八年小口太郎作詞作曲とあるのみで（大正八年は小口太郎の三高卒業の年）、レコード会社の解説にも小口太郎についてはよく分からないとあるだけでした。堀準一氏はこの文章で「周航歌」の元になった曲が「ひつじぐさ」であることを明らかにしました。堀氏に続いて安田保雄氏（昭和九年文科丙類卒）の調べが始まり、別にNHK大津支局にそのこ

ろ勤めておられた飯田忠義アナウンサーの調べも始まりました。飯田氏は昭和四九年テレビ番組「われは湖の子——琵琶湖周航の歌」物語——」を企画制作されたお方です。「周航歌」研究家の間で今もバイブル視される安田氏の追善文集『小口太郎と「琵琶湖周航の歌」』、飯田氏の「琵琶湖周航の歌——小口太郎・その生涯——」が昭和五二年相次いで出版されております。いっぽう堀準一氏は昭和五三年、昭和五四年、引き続いて「三高同窓会会報」五〇号、五一号に「琵琶湖周航の歌と『未草』」正篇、続篇を連載されました。続いて堀氏は「会報」五二号に「寮歌三題」と題して大正初期の『三高歌集』について、また大正三三ころから三高内に存在した音楽グループ「桜楽会」について報告され、「会報」五三号（一九八一）には「史か小説か」と題して当時の『神陵史』の周航歌大正七年彦根披露説を論破なさいました。他方、昭和五五年滋賀県で出している季刊誌「湖国と文化」、アポストロフィ八〇夏第一二号に「琵琶湖周航歌の実像」と題して、「ひつじぐさ」の作曲者として「吉田ちあき」の名前を初めて特定なさいました。真鍋左武郎氏（大正六年二部丙類卒。ラグビー部）の保存されていた手書きの楽譜によるもので、ここに至るまでには数々の言い知れぬご苦労があったと思いますが、堀氏は途中の成り行きなどについてはあまり口にされないお方で、そのご苦心のほどは我々が一人一人想像してみるよりほかはありません。二年後昭和五七年「会報」五六号に「琵琶湖周航の歌と『未草』」完結篇として吉田千秋の名前はもとより、「ひつじぐさ」の印刷楽譜の発見（「音楽界」誌大正四年

八月号)、千秋が大正四年中に東京から新潟へ引越していることなどを報告なさいました。堀氏の最も重要な論文『琵琶湖周航の歌と「未草」』正篇、続篇、完結篇は、いささか宣伝めきますが、私の本の中に「研究の部」として収めてあります。堀氏の唯一の弱点は大正六年完成説を固執されたことですが、それを否定するために大正七年完成説の水上部OB、野呂達太郎氏(昭和11年文科甲類卒)の論文と一緒に収めました。

吉田千秋の身元探しはさすがの堀氏も手を焼かれたかに見え、その後調べは滞ったままでしたが、平成三年心筋梗塞で急逝されました。

このあと、話は平成五年の千秋の身元判明に戻る訳ですが、滋賀県今津町は町起こしの一環として「琵琶湖周航の歌」に因むイヴェントを企て、三高同窓会にも協力を求めて来られましたので、「会報」の「コピ」、『小口太郎——生誕九〇周年記念誌——』やCDなど当方で可能なものすべてを提供するいっぽう、新しいことをするなら、東京から新潟へ引越したとまでしか分かっていない吉田千秋氏の情報を確認するのが望ましいとお願いしたと聞いております。

千秋搜しの今津町の発信者はイヴェントの実行委員会事務局長、同町教育委員会(当時)の落合良平氏でした。氏は以前から「周航歌」の作曲者を知りたいと願い、平成四年一月にも読売新聞を通して作曲者に関する情報を求めたりなさっていました。このときは不発に終わりました。今回この発信を受け止めたのは、新潟県北蒲原郡安田町で同町出身の歴史地理学の大学者・吉田

東伍博士の研究をしている吉田東伍・高橋義彦記念 安田歴史地理研究会代表・旗野博氏でした。同氏は平成五年秋、同研究会が開いた特別企画展「吉田東伍とその周辺」を準備中でしたが、東伍博士の次男に吉田千秋という人がいたことを知っておられたのです。この間の事情は、始め新聞地方版で騒がれているに留まったこの判明の成り行きを、全国的に初めて知らしめた総合雑誌「潮」の、同年一二月号の山村基毅ルポ・ライター執筆の記事に物語られております。

吉田千秋は明治二八年二月一八日、現・新潟県新津市大鹿で父東伍、母カツミの次男として生まれました。「大日本地名辞書」で今も名高い父東伍は隣町北蒲原郡安田町の旗野家から出て二〇歳のとき大鹿の吉田家に養子として入ったのです。吉田家には千秋の次の弟・吉田冬藏先生（新潟大学、日本歯科大学元教授）が現在九一歳で今もご存命でいらっしゃいます。

その後千秋の遺品は冬藏先生がご高齢でご病気がちということもあってなかなか出て参りませんでした。翌平成六年八月、冬藏先生の手でかなりの遺品が出て、その中に千秋の二七点の投稿・掲載誌リストが記された手帳が含まれていた訳です。私はこのリストに基づき直ちに国会図書館に赴き、「ローマ字」誌に載った八点を発見しました。他の雑誌はさすがに国会図書館にもなく、絶望と思われていましたが、一月一〇日早稲田大学総合学術情報センターで催されていた「市島春城展——没後五〇年記念——」（市島春城は東伍の義兄に当たり、大隈重信を助けて早稲田大学の創立に功労のあった人。彼は生涯東伍博士に物心両面の援助を惜しみませんでした）

た。東伍も後には早稲田大学教授になっております)の会場で、それまで連絡を取り合っていた旗野博氏と私とが初めて対面し、同時に早稲田大学図書館特別資料課長・金子宏二氏(当時。安田町出身)にも紹介され、金子氏から「稀覯雑誌探しは『學術雑誌総合目録』(丸善刊。全七巻)に拠るのが良い」との貴重なご示唆を賜ったのです。私はこのご示唆に基づき、杉並区立中央図書館で同目録の必要箇所を閲覧・拡大複写し、東京大学法学部付属近代日本法政史料センター(一名「明治新聞雑誌文庫」)、国立音楽大学付属図書館、東京音楽大学付属図書館に的を絞って「ローマ字世界」誌、「月刊楽譜」誌を探しました(国立音大と東京音大とは、前者は立川駅からバスというかなり不便な所にあるし、複写願ひも郵送ですむ後者の方がはるかに便利なお後で分かりました)。両者とも余りに古いせいかりスト九「月刊楽譜」誌『かちかち山(作曲)』は残っておらず、全く絶望と見られる結果に終わったのは誠に残念至極でありましたが、それでも「ローマ字世界」誌四点、「月刊楽譜」誌二点を見つけることが出来たのであります。別途に早稲田大学図書館にたまたま「家庭のローマ字」誌大正五年・七年の合本が残っており、金子課長のご努力でそのうち四点を見つけることが出来ました(「たまたま」残っていたのではないかも知れませんが)。市島春城は早稲田大学図書館長を長らく務めていましたから、親戚の千秋が熱心に投稿していた「家庭のローマ字」誌をわざわざ買い上げたことも充分考えられます。これで残るは、全く絶望と見られる「月刊楽譜」誌の一点と、「家庭のローマ字」誌の六点(同誌は

「家庭の」と称したのが崇つてか學術雑誌とは見なされていらないのだと思います」となるのですが、「月刊楽譜」誌大正六年八月号の「高嶺の夏」（千秋の才を以てしても「ひつじぐさ」以外には彼はこの一つしか重音唱歌を書いていません）は、堀準一氏のご努力で前から知られていた、より伝統と權威のある「音楽界」誌大正七年七月号に違う形の異本があり、千秋の約一年後の二重投稿と見られますが、千秋の思惑には反いて、「音楽界」誌は伝統のうゑに胡座をかいていたのか、ミスプリントが多く、堀氏のご努力にも拘わらずリストには記されていません。前置きが大いぶん長くなりましたが、発見されたささやかなこの二〇点（堀氏のご努力で前から分かっていた「音楽界」誌三点を含みます。ただしうち一点は千秋の二重投稿です）、別に平成六年一月生家から発見された、和紙に墨で書いた変体仮名の歌集「海の泡集」、計二一点を材料にして私の貧しい「吉田千秋論」を述べてみようと思ひます。

これらの遺稿で意外だったことは、千秋が「音楽界」「月刊楽譜」の二音楽雑誌以外は、「ローマ字」「ローマ字世界」「家庭のローマ字」三誌のローマ字雑誌にしか投稿を發表していないローマ字国字論者だったことです。

ローマ字国字運動、すなわち我が国の文字としてローマ字を採用しようという運動は、明治初期の有力な知識人、西周にしあまねが「明六雑誌」めいろうく明治七年三月号に「洋字ヲ以テ国語ヲ書スルノ論」を發表して以来、今からでは想像も付かぬほど、戦前には盛んだったのです。大正時代ローマ字誌

に文章を寄せていた有名人としては、手元にある各誌の目次をちよつと見ても、「ローマ字」誌（明治三八年創立の「ローマ字ひろめ会」発行）の執筆者としては石井柏亭、窪田空穂、高村光太郎、嘉納治五郎、芳賀矢一（明治四二年「ローマ字ひろめ会」から分裂し、明治四五年完全に独立した「日本のろーま字社」の相談役を兼ねる）、上田万年（「日本のろーま字社」賛助員を兼ねる）など、「ローマ字世界」誌（日本のろーま字社発行）の執筆者としては田丸卓郎・事務指図役（日本式綴り方主唱者の一人）、田中館愛橘・相談役（田丸卓郎・事務指図役と同じく日本式綴り方主唱者の一人。後でちよつと触れます）、岡本一平、土岐哀果、三上参次、寺田寅彦（賛助員）など、「日本のろーま字社」の賛助員としては本多光太郎、藤原咲平、石川千代松、狩野亨吉、菊地大麓、金田一京助、内藤濯、新渡部稻造、大河内正敏、沢柳政太郎、関根正直、新村出、白鳥庫吉などが名を連ねています。田丸卓郎理学博士は「周航歌」の作詞者・小口太郎の東京帝国大学時代、長岡半太郎教授らと並んで指導教官の一人で、小口太郎の東大卒業のとき東京帝国大学航空研究所に入所を推薦した人です。田丸博士については吉田千秋も「宮下氏の論文を読み（外国固有名詞とローマ字）」の終わりでちよつと触れています。寺田寅彦は航空研究所時代小口太郎の指導に当たった人です。何より小口太郎自身が大正一〇年ころ東大の中のローマ字愛好者のグループに入ったりもしています。そのほか時代は飛びますが、昭和八年前ころ三高内部にも「ローマ字会」があったなど、いずれも戦前のローマ字国字運動の盛んさを偲

ばせる事実です。

発見された二一点の遺稿の中で重要な意義を持つものは、先ず第一に「琵琶湖周航の歌」のルーツ探しという立場から見れば、作曲のみならず元の曲「ひつじぐさ」の訳詞も千秋の手になるものであることが「ローマ字」誌大正二年九月号（一八歳）への投稿によって明らかになったことです（堀氏の発見なきった「音楽界」誌の楽譜には、作詞者の名前は記されていませんでした）。堀氏は「ひつじぐさ」は多分訳詞であり、訳詞は或いは千秋自身ではないかと予測されていました。炯眼と申すべきでしょう。英語の元の詩“Water-lilies”が付いています。彼は約二年後「音楽界」誌大正四年八月号（二〇歳）に混声四部合唱の作曲を発表するまで三カ所の推敲を行なっています（うち二カ所は字余りの修正）。

私の気になることは、元の詩“Water-lilies”が「英国民謡」と記されることが多いという点です。著者は匿名ですが E. R. B. という人の作曲集“Songs for our Little Friends”には特に“Words by E. R. B.”と記されていて作詞・作曲ともに E. R. B. だったことを示しています。出版元は Frederick Warne & CO., London、刊行された年は明治八年です。曲は輸入されませんでした。子供向けの簡単な曲であることは、堀準一、安田保雄両氏の研究によっても間違いありません。

“Water-lilies”の訳詞には「おぼろ月夜の月明かり」に始まる千秋訳の“Hitsuji-gusa”より先

に、我々がコンサイス英和辞典でお世話になった石川林四郎教授訳の「霞める月の淡く射す」に始まる「睡蓮」との二通りがあります。両者の関係について憶測のそのまた憶測を逞しゅうするならば、千秋が石川教授の訳詞と英語の元の詞“Water-lilies”とが載った「英語青年」誌明治四三年三月一五日号（当時月二回刊行）を見ていたと仮定して（一五歳。旧制中学四年生）、千秋は花の名前が題名のほか、一番終わりの行の「蓮」しか出て来ない石川訳に不満だったのではないでしょうか？ 睡蓮と蓮とは科は同じ睡蓮科でも、属が全く違い、花も全く違います。蓮は花梗が長く、水面のうえに高く突き出て花が咲きます。千秋は彼の好きなやまこととばで、「睡蓮」のやまこととば「ひつじぐさ」をも知っていました……。

第二に思想的な立場から見て重要と思われるのは、「ローマ字」誌大正三年一二月号（一九歳）の「人殺し」に現れる反戦思想です。千秋の宗教への関心は、「周航歌」の作詞者・小口太郎とともに、いろいろ言われておりますが、千秋の初期（大正元年。一七歳。東京府立四中卒業の年。七月三〇日明治天皇崩御。大正と改元）には仏教への信仰を示す写経も二綴り残されております。しかし「人殺し」の反戦思想は明らかにキリスト教のものです。大正二年、三年の間にキリスト教との決定的な触れ合いがなくてはなりません。ところが実は、幼いときから結核を病んでいた千秋は、東京府立四中の三年生の一月、神奈川県茅ヶ崎にある南湖院というサナトリウムで療養生活を送っているのです。南湖院は今「太陽の里」という老人ホームになっておりますが、

千秋の療養の二年前には国木田独歩がここで療養生活を送り、病死した病院です。経営者の高田
畔安医学博士が熱心なクリスチャンで、何らかの影響を千秋に与えたことが考えられますが、決
定的な影響を与えたか否かについては確かな証拠はないとされています。千秋のクリスト教との
関係は、大正四年秋（二〇歳）療養のため郷里大鹿に帰った後、内村鑑三の弟子・木村孝三郎の
指導する近所の無教会派の集会所に足繁く出入りするようになってから、また親密の度を加える
のですが、短かった晩年、二四歳の死去（大正八年二月二四日）に至るまでクリスト教への信仰
と仏教への信仰とが分かれなままごっちゃになって続いていたと察せられます。

とにかく、大鹿へ帰ってからの千秋のクリスト教との関わりを示す文章を『新潟県クリスト教
史上巻』新潟県プロテスタント史研究会編（一七）木村孝三郎と大鹿教友会の信徒たち」新潟日
報事業社出版部一九九三刊行の中から引用してみましよう。

大鹿は名著『大日本地名辞書』で名高い日本史家の吉田東伍ゆかりの地だが、その次男の千
秋はゆたかな音楽の才があり、幾つもの賛美歌を作曲・編曲し、これを大鹿の信徒たちは愛唱
した。たとえば「なつかしくも　うかぶおもい　あまつふるさとは　ややにちかし」（三三八
番「旧」、四八二番「新」）を、かれが独自に編曲したものを憶えている当時の信徒の方から聴
かせていただいたことがあるが、日本の御詠歌風の哀感が心底にしみとおるのを覚えた。ちな
みに、今なお歌いつがれている第三高等学校（旧制）の寮歌、琵琶湖周航の歌「われは湖の

子」の哀愁にみちた調べは、千秋が一九一五年（大正四年）に発表した「ひつじぐさ」が原曲といわれる。

「琵琶湖周航の歌」が「哀愁にみちた調べ」であるかどうかは問題であり、私はむしろ「力強く」歌うべき曲だと思いますが（『三高歌集』にもDOLCE「優美に」と記した年とFORTE「強く」と記した年と両方あります）、それを論ずるのはここではやめておきましょう。

第三に注目すべきは、彼が「R」と「L」について（「ローマ字世界」誌大正三年一月号。一九歳）、「C」の論（櫻根博士に）（「ローマ字」誌大正四年五月号。二〇歳。千秋の主張ではアルファベットの「S」は「S」とフランス読みになります。フランスのみならずヨーロッパ各国では「S」と呼ぶ国が一番多いという理由からです）、更に「再びC」について（同年七月号）などで繰り広げる言語学上の博識で、この博識に支えられて彼がローマ字綴り方論争などで發揮する言葉についての識見が、実は彼の本領ではないかと思っております。「R」と「L」について」は先に述べた田中館愛橘理学博士への共感を動機として書かれましたが、「R」と「L」とをごっちゃにして使ってもよいというのが既に彼の柔軟性を示しております。彼はこの主張のためにヨーロッパ各国語はもとより、ラテン語の知識までを動員しています。

千秋が病のため帰郷した年、大正四年の前半はある意味で千秋の論争の年でもありました。最初の論敵・宮下辰次郎氏はたいした相手でもありません。宮下氏はその論の後半において日本式

綴り方（文部省式、訓令式とも）を非難して、ローマ字会式綴り方（修正ヘボン式、標準式とも）を主張しますが、ローマ字会式のみを主張するのが既に一種の偏りであります。千秋は初めから日本式の「ローマ字世界」誌にもローマ字会式の「ローマ字」誌にも融通無碍に出入りしています（尤もこれは彼の特技ではなく、彼の第二の論敵・櫻根孝之進医学博士も「ローマ字ひろめ会」の大阪支部の幹事を務め、毎号のように「ローマ字」誌にローマ字綴り方に関する論説を寄せながら、「日本のろーま字社」の賛助員にも名前を連ねています。先に挙げた芳賀矢一、上田万年の二人の文学博士も、「ローマ字」誌に文章を寄せながら「日本のろーま字社」のそれぞれ相談役・賛助員を兼ねているのと同様です。「ローマ字ひろめ会」と「日本のろーま字社」とは「ローマ字会式綴り方」と「日本式綴り方」という点では対立関係にありながら、我が国の文字をローマ字にするという大目的については友好関係にあったのです。ちなみに千秋の短かった晩年、主として単音唱歌を投稿するようになる「家庭のローマ字」誌は、大正四年の創刊で、ローマ字ひろめ会発行、「ローマ字」誌の姉妹誌で、当然のことながらローマ字会式です）。

宮下氏の前半の主張は外国の固有名詞はすべて元の言葉を尊重すべし（イギリスは England、ドイツは Deutschland と綴れと言ふ）という過激なものですが、それに対する千秋の反論は言い慣れた国の名等は我が国の読み方に従い、言い慣れていない地名、人名等はその国の読み方に従うという折衷的なものでした。「オイローパのごとき殆ど世界的の語、否、文字は、氏の言わ

るごとくヨーロッパとするのは少し変なものである。これはオイローパとしてもよからう」という言葉は、端的に彼の、中庸に就こうという態度を物語っています。

第二の論敵・櫻根孝之進博士はさつきも言いましたように「ローマ字ひろめ会」の大阪支部の幹事を務め、毎号のように「ローマ字」誌に論説を発表している大物でした。その、「g」を「ch」の代わりに、「ck」を「kk」の代わりに使いたいという少しの偏りを見逃さず、千秋がヨーロッパ各国語の知識を動員して「C」の論（櫻根博士に）を繰り広げるのは、大胆不敵という言葉に相応しいのですが、この権威への挑戦は千秋の父・吉田東伍博士にも先例があります。東伍博士はまだ無名時代、蟻斧生、落後生のペンネームで、当時の歴史学の権威・田口卯吉（号は鼎軒）に論争を挑み、田口をしてついに「横槍にても豎槍にても余は最早答弁の氣力を失ひたれば、十分に衝き立てらるべし。我陣はメチャメチャになりても構はざるなり」と言わしめたのです。千秋の権威への挑戦は明らかにこの父・東伍博士の血を引くものと言えましょう。ここで注目すべきは「宮下氏の論文を読みて」の大半、固有名詞の綴り方を論ずる場合にも見られるように、彼が決して極端でも過激でもないことです。むしろ反対に、彼は周りに極論が現れた場合、それを中庸に引き戻す平衡感覚のような役割を果たしていると思われます。それが時には、彼が「R」と「L」とをごっちゃにして使ってもよいと言うように、彼の現実との妥協と見えるのであります。

さて、千秋の「C」の論（櫻根博士に）に対する反論「C」の論（吉田千秋氏にお答え申す）（後で述べるように櫻根博士は [ts] と [tʃ] とをごっちゃにして同じものと思い込んでいましたから、[si:] を [tʃe:] とイタリヤ読みにしたか、[tʃe:] とドイツ読みにしたかは、どちらとも分かりません。Yoshida Chiaki Shi とローマ字で書くと、漢語の Shi が何のことやら分からぬから Yoshida Uji と大時代なやまとことばになります。「ローマ字ひろめ会」の「ひろめ」、「事務指図役」の「指図役」のようなやまとことばは、ローマ字国字論では、表音文字であるローマ字に、表意文字である漢字のような意味を表す力はありませんから、必然的に発音だけで意味を分からせようとして、やまとことば尊重となります。「ローマ字ひろめ会」を「ローマ字普及会」、「事務指図役」を「事務局長」とローマ字で書いたのでは何のことやら分からぬという訳です。そこがもともと漢語嫌い、やまとことば好きの千秋の好みに合ったのです）では櫻根博士は明らかに守勢に立っています。私は語学が苦手なので読み間違いを恐れず申すならば論争は殆ど発音記号で書いて [ts] と [tʃ] との二つの二重子音をごちゃませにして同じものと思いついでいた、医学博士ともあろう櫻根氏の、千秋の「再び C」について「何がお考え違い」に端を発しています（まだ発音記号も使われていない幼稚な時代だったので。だから櫻根博士程度の知識でも権威面が出来たのです）。千秋の再反論「再び C」については再び各国語からラテン語についての知識までを動員した千秋の独壇場で終わります。彼の主張

するとところがおおむね現状維持であることに我々は重ねて注目しなければなりません。

そのほかこの論争で櫻根博士を田口卯吉と同様に完全な敗北と見る根拠を、私は語学が不得手なので、箇条書きにして挙げておきます。

① “k”の代わりに“ch”を用いたいという論拠がただ“k”と手で書くのが面倒臭いという薄弱な根拠に発していること。

② エスペラントを櫻根博士は語尾の“o”を落として誤って綴っているが、千秋は語尾に“o”を付けて正しく綴っていること。

③ 櫻根博士が“ch”の代わりに“c”を用いればドイツ語の“ch”をそのまま取り込むことが出来ると書いたのに対して、“ch”をそのままにすれば英語の“ch”をそのまま取り込むことが出来ると、千秋にすぐ切り返されていること（ドイツ語の例はうまく思い浮かびませんが、英語の例については千秋はこんな例を挙げています。「benchをbenc(i)とせず、そのままbench(i)として日本語にする」)。

④ 櫻根博士が“ch”を我がローマ字綴りのように用いているのは、ヨーロッパ語のうちではイギリス語だけのようであるが、そのほかにあるだろうか?とだれにもなくお伺いを立てているのに対して、「スペイン語でもchをイギリス語のchのように読んでいる」と、千秋にすぐ明快に答えられていること。

⑤ 櫻根博士が「世界のうちで、綴りの最も整っているのはイタリア語とドイツ語である」とは、専門家の説である。それで我がローマ字綴りを整えるにも、なるべくかような国言葉（「国語」のやまとことば）を目安にしたい。イギリス語のような乱れた綴りを目安にしたくない」と書くのに対して、「我々のローマ字綴りは、今最も完全だと言われているイタリア語の綴りよりも一層 *phonetic* である。イタリア語やドイツ語を参考にすることもよからうが、手本にする必要はない。我らこそ彼らに手本を示すべきであらう」とか、また「もしやむを得ず（外国語を日本語に）取り入れる場合には、どこの国の言葉は綴りが乱れているから入れないとか、どこの国の言葉は綴りが整っているから入れるというようなことをせぬこと。何故ならば綴りの乱れた国語、例えばイギリス語から多くの言葉を採ったとて、我が綴りが乱れるようなことは断じてないからである」と自信に溢れた言葉を千秋は返していること（これは千秋の自信というよりも言語学上当然の理屈と思われるのですが、当然の理屈に櫻根博士が気づいていないことになりません）。

かくして千秋の「再び『C』について」、特にその終わりの「とづくに言葉（「外国語」のやまとことば）の取り入れについて」の(a)から(d)は、千秋の言葉への見方が至り着いた最高峰、従って千秋の遺稿の一番大きな達成であると思うのであります。すなわち(a)は「（外国語を日本語に）なるだけ取り込まず、出来る限り我がやまとことばで言い換えること」、(b)は先ほど述べた⑤の

後半、すなわちやむを得ず取り入れるならば、取り込む外国語を選び好みしなくても我が国の綴りが乱れるようなことは断じてないという自信（これが千秋の自信というよりも言語学上当然の理屈と思われることは先に述べました）、(c)は「外国語は決して書き換えないこと云々（つまり元の綴りのままローマ字文に取り入れること）」、(d)は「学問上の専門語もなるべく（やまとことばに）言い換えたものであるが、もし出来ないとすればラテン語のとおり、ラテン読みにした云々」であります（千秋のやまとことば好きは現代のカタカナ外来語排撃とはだいぶん異なり、漢語排撃を狙いとするものです。例えば「交響楽」という言葉を、まだこの言葉が定着する前だったので）が、耳で聞いて何のことやら分からぬからという理由で、シンフォニーという原語を使えと主張しています。ヨーロッパ各国語は元の言葉どおり使えという主張だったので、もちろんローマ字文の中で、元の綴りのままに）。

櫻根博士との論争のいっぽうで千秋が「音楽界」誌大正四年五月号に発表した論文「音楽者と外国語」においては、彼の、善く言えば柔軟性・中庸性、悪く言えば妥協的・折衷的な性格があらわに出ています。彼は、音楽者にとって第一に重要な外国語はドイツ語、第二に重要なのはイタリア語及びフランス語であると説き、その直後次のように記します。

次に英語は音楽上の語として価値はゼロである。我らの寡聞なる、イギリスの音楽者としてバルフ、パーセルその他一、二の名前を知るに過ぎぬ。

さらにすぐ続けて、

しかるに、ひるがえって考えてみると、我が国では今の所、外国語は英語のほかは殆んど通じないので、これを知らぬと少し具合が悪い。又、西洋音楽のことも英語を通して、一通りは知ることが出来るから、これは先ず知って居らねばなるまい。さて、これをつづめて言えば、只仕事のかたわら音楽を楽しむというような人、つまり専門の音楽者たらん事を望まない人はドイツ語及び英語、もしその人が英語を得意とするならば英語だけでもよからう。と現実への即応を述べています。

論文の後半は「舶来語の読方の統一」に移り、「思うに舶来の術語はすべて英語の綴り及び発音（前に言うた通り、我国では英語がひろく行われて居るから）に従うてはどうであろうか？」とせつかく原則を立てながら、一、二の例外（オクターヴ↑オクテイヴ　ワルツ↑ウォールツ）を現実には即して認めるのです。

千秋は語学の天才であるとともに、妥協の天才と言えば聞こえは悪いが、彼は短い生涯に二つの論争を行なっているとおり、いささかの偏りをも敏感に嗅ぎ取って容赦しない、厳格な中庸の精神の持ち主であり、同時にむしろ融通無碍の天才ともいうべき才能をも兼ね備えた、早世惜しんで誠にあまりある、まれに見る人物でありました。

私は元国語教師であるので、ローマ字国字論にはもともと反対の立場であり、その後の成り行

きを見ても分かるように、千秋たちローマ字国字論者らの努力は結局は実りませんでした。以上私の読み取った所を語学の不得手を顧みず、敢えて読み違いの危険を冒して述べさせて頂きました。

千秋の詩歌には、この厳格な中庸主義者が合わせ持っていた、植物を愛し花を愛し、その栽培を趣味とした、全く星董派と見られ兼ねない繊細な神経が滲み出ております。歌集「海の泡集」は大部分花を題材とした和歌で占められておりますが、その終わりには彼が直面せざるを得なかった死生観の問題が、「来世」「彼岸」と題された四五番、四八番では仏教的に、「神の御楯」という用語や「天国」という題を持つ四六番、四九番ではキリスト教的に閃いて、読む者をはっとさせます。こういうところにも先ほど述べました、千秋の中では仏教的なものどキリスト教的なものどが最後まで分かれないうままごっちゃになって存在していたという憶測を助ける根拠ともなっております。

さらにこの憶測を助ける資料が吉田東伍・高橋義彦記念 安田歴史地理研究会代表・旗野博士の「琵琶湖周航の歌 作曲者『吉田千秋氏』のこと」と題する一九九三・〇六・一七・付の「第一六回例会レジュメ」の中にあります。このレジュメは大部分六月一三日（これは「新潟日報」の記事で千秋が東伍博士の息子であることに旗野氏が気づいた六月一二日の翌日に当たり、この件に関して旗野氏が冬蔵先生を訪問した最初の日付に当たります）に行なわれた吉田冬蔵・芳子

夫妻からの聞き書きですが、その中にこうあります。

晩年には仏教にも興味がありましたね。仏書を多く読んでいました。また、あちこちの社寺をめぐるっていましたね。彼は自分の千社札をもっていました。「越後 大鹿 よしだひぐるま」としていました。（日車は向日葵の別名で、彼は向日葵を愛し、「ひぐるま」を自分のペンネームとしていました）

仏教、キリスト教、両方に関心をもっていました。近くの「木村」という「内村鑑三」と交際をしていたことのある家の当主ともやりとりをしていました。

祖父耕次郎は先祖伝来の仏教から神道に宗旨替えした人ですから、キリスト教なぞもっての外だったわけですね。

「木村家とつきあっているとヤソ教になる」と叱ったんですが彼は平然と「ヤソ教を研究しているだけで信心することはありません」といいましたね。

大正四年二〇歳で彼が故郷へ帰ったとき、彼は既に当時の不治の死病・肺結核に蝕まれていました。故郷大鹿へ帰り着いたとき彼は、同じ死ぬならここでと思って帰って来ましたが、という意味のことを言っていたと言います。彼の発病は既に彼の幼いときにあったと言いますし、死生観は彼の常に向かい合っていた問題だった訳ですが、彼の死の予感について私は彼の散文の最長篇「火

星の研究」(「ローマ字世界」誌大正三年五月号。一九歳)の結び『火星の末路』を思い出さざるを得ません。

団結心の強い火星の人々は馬鹿げた戦などはとうの昔にやめ、従って国境などというつまらないものもなく、ただ一致団結し、全力を尽くして、今や、いつとき、いつとき目の前に迫りくる「渴き」という苦しみと戦っているのである。

言い換えれば、彼らは火星という大きな舞台のうえで目覚ましい生きた芝居を演じつつあるのだ。仕舞いには敗れると知りながら、雄々しくも、全火星を挙げて恐ろしい「渴き」の悪魔と戦い、刀折れ、矢尽き、倒れてのち己む覚悟であるとは物凄くまた勇ましい話ではないか！私は、千秋がここで意識していたにせよ、無意識であったにせよ、はつきりと自己の死を予感していたことを感じて、ぞっとする感じを抑えることが出来ないのであります(千秋の反戦思想はこの引用にも既に窺えます)。

思えば「琵琶湖周航の歌」の作詞者・小口太郎も、作曲者・吉田千秋も、ともに二〇歳代で若死にするというように、彼らの運命は生きてるときから既に非運でありました。特に小口太郎は、兵役を目前にして電子顕微鏡の開発が思うように進まない焦りから来たノイローゼによる自殺であります。しかし彼は母校・長野県立諏訪清陵高等学校や旧制第三高等学校同窓会の協力もあり、その故郷において十分な顕彰を受けています。しかるに吉田千秋のほうは、その唯一の母

校・旧制東京府立第四中学校（現東京都立戸山高等学校）の同窓会・城北会にも冷遇無視されたままであり、今我々がこのささやかな集いにおいてようやく顕彰の第一歩を踏み出そうとしていくところでもあります。この秋、父東伍博士の故郷・安田町に建設される吉田東伍博物館には千秋のコーナーも設けられると聞いております。願わくは生誕百周年も過ぎた今、在天の靈安らかに憩い給わんことを。ご静聴を感謝申し上げます。

（元東京都立戸山高校教諭）